東京新島研究会だより No.９５　　発行：２０２４．３．７

良心の碑（いしぶみ）

２０２４年１月２３日　於大磯町

終焉の地　碑前祭

学校法人同志社を代表して出席された小崎女子大学学長を囲む元女学生

（写真：木原康博・江澤香）

次回の研究会

日時　４月２３日（火）１４時から

場所　東京サテライト・キャンパス・セミナー室

内容

（１）研究発表

江澤香『高梁における新島襄』

（２）総会（会長選出・会計報告）

当日、年会費 3000 円を集めさせていただきます。

窓　コロナ禍を経て、数年ぶりに湘南・大磯での新島襄終焉の地の碑前祭に参加することができた。いつものように讃美歌に始まり、京都からの同志社関係者や地元校友会、同窓会の皆さんのあいさつの後、カレッジソングで終わった碑前祭は、これまでと変わらない時代に戻ったことを教えてくれた。

碑前祭の空気を一段と清々しく、豊かにしてくれたのは、大磯町の人たちの存在だった。大磯町長は幕末の困難な時期に脱国に踏み切り、苦学して学業を修め、同志社創立に至った新島の決断力をたたえ、地元の方々は新島作の漢詩や和歌を詠んでくれた。近くの大磯教会は例年通り、厳しい寒さを避けるため（幸い今年は天候に恵まれたが）、休憩所を準備してくれた。大磯教会は同志社教会とは若干、宗派を異にするとのことだが、お茶を供してくれたご婦人は「新島先生が亡くなられて何年になるのですか」と問いかけてくれた。

「わが町が生んだ偉人」を敬い、誇る気持ちは洋の東西を問わない。しかし、たまたまこの地が終焉の地となった人物をこれほどに語ってくれる人たちを他に知らない。大磯町のホームページには「新島襄終焉の地碑」が町の史跡の一つとして紹介され、碑が設置されている公園には英文を伴った立派な案内板が整備され、清潔感が漂っている。駅への道すがら、大磯小学校の校庭から子どもたちの元気な声が聞こえた。町長は、大磯と新島の関わりを子どもたちにも教えたいと語っていた。あの子たちに、いくぶんなりとも新島の志が伝わっていくだろうか。

志半ばにして湘南のこの地で遺言を語らざるを得なかった新島の無念の思いは、この地の人たちの温かい目によって見守られている。

（福間　宰）